

社会技術研究開発事業
令和4年度研究開発実施報告書

「人と情報のエコシステム（HITE）」

研究開発領域

「法制度と人工知能」

研究代表者氏名 角田 美穂子
一橋大学法学研究科 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施内容・結果	2
2 - 3. 会議等の活動	9
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	11
4. 研究開発実施体制	11
5. 研究開発実施者	16
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	16
6 - 1. シンポジウム等	16
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	17
6 - 3. 論文発表	19
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	19
6 - 5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	19
6 - 6. 知財出願	19

1. 研究開発プロジェクト名

法制度と人工知能

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. 研究開発目標

1. 日本版オンライン紛争解決予測システムの開発。
2. Horizon Scanningの手法を用いたワークショップを通して、2030年～2040年ごろを想定した未来シナリオを複数、日本と英国の両国で作成・呈示することを通して、両国の文化的・社会的・歴史的文脈に即したテクノロジーの社会受容の傾向、条件についても検討をくわえ、提言としてまとめる。
3. 紛争解決へのAI導入ガイドを策定し、公表する。
4. コーポレートガバナンスの理解の刷新、わが国の法学にあまり見られなかった戦略的な政策提言、それを支える法理論など、学術研究論文ないしシンポジウム講演録など研究成果を日英で合計5本公表する(日本語／英語)。
5. 英国側ではケンブリッジ大学のDeakin教授、Steffek教授を核として、司法判断の自動化とその限界についての研究について産官学——「官」も英国の司法省や弁護士会のみならずOECDなどの国際機関、「学」も法学と計算機科学、数学など文理横断型の緊密な人的ネットワークが構築されている。このネットワークに日本メンバーも参画し、日本国内にも一橋大学を拠点とする同様のネットワークを構築する。

2 - 2. 実施内容・結果

(1) スケジュール

当初は令和4年度末で終了予定であったところ、令和5年12月末まで延長が認められた。

実施項目	初年度	2年度目	3年度目	4年度目	5年度
WP1：未来シナリオ 「仕事と労働法の未来」 日英比較					
WP2+WP3：法制度・ 言語を横断した民事紛 争解決結果予測モデル の実験・研究					
WP1+2+3：法推論ア ルゴリズム開発のインパ クト研究					
WP3：日本版・民事 紛争解決予測モデルの開 発・実験					
WP3：『リーガルイノ ベーション』関連企画					
WP3：紛争解決へのA I導入の倫理ガイド策定					
WP3：民事紛争解決結 果予測モデルのためのデ ータセット構築ガイドの 作成・公表					

(2) 各実施内容

① Horizon Scanningによる法律と人工知能の未来シナリオ研究グループ(WP1)

当該年度の到達点①

WP1：「テクノロジーを利用した司法アクセスのイノベーション」未来シナリオ作成
実施項目①：「テクノロジーを利用した司法アクセスのイノベーション」未来シナリオを作成し、アニメーション化する

実施内容：

ギグエコノミーが進展し、司法判断を実装したAIサービスが普及した社会を想定し、労働法専門家の協力を得ながら労働法をテーマとする未来シナリオを作成する。

期間：令和4年4月～令和5年3月

実施者：鷺田祐一、上原渉、角田美穂子

対象：仕事を取り巻く環境が変化したとき人間の法的保護はどうなるか、人々は、企業は、紛争解決機関はAIサービスをどう使うのか。日本の労働紛争・ステークホルダーを熟知する研究協力者の協力を得ながら、リアリ

ティ溢れる未来イシュー、未来シナリオを作成し、アニメーション化する。英国チームも同様の作業を実施する。

② 法律と会計のコンピューテーション研究グループ(WP2)

当該年度の到達点②

WP2+3：日本版オンライン紛争解決予測システムの開発を実現する。

実施項目②-1：WP2： 普遍性ある法的推論モデルを実装したAI開発・実験

実施内容：

2021年度中にデータセット構築が完了することを受け、英Court Correct社との共同研究をもう一年間継続し、予測の精度の向上、様々なAI技術を用いた実験を実施する。AIコンサルタント、法曹有資格者の協力を得ながら、AIサービスとして実装可能なレベルを目指す。

期間：令和4年4月～令和5年3月末

実施者：竹下啓介、角田美穂子

当該年度の到達点④

WP1+2+3： 法推論アルゴリズムのインパクト研究

実施項目④-1： 法推論アルゴリズムのインパクトについて研究

実施者：角田美穂子、野間幹晴、竹下啓介、山本和彦、鷲田祐一、上原渉

③ 人工知能による紛争解決予測研究グループ(WP3)

当該年度の到達点②

WP2+3：日本版オンライン紛争解決予測システムの開発を実現する。

実施項目②-2：WP3：説明可能な紛争解決結果予測モデルの開発・実験

実施内容：

2021年度に引き続き、東京工業大学情報理工学院・徳永研究室・山田寛章「民事紛争の説明可能な紛争解決結果予測モデル」研究(JST-ACT-X)と連携・協力する。2021年度中にデータセット構築が完了することを受け、紛争解決予測モデルの開発・実験を実施する。

期間：令和4年4月～令和5年3月

実施者：山本和彦、竹下啓介、角田美穂子

当該年度の到達点③

WP3： 紛争解決へのAI導入ガイド策定

実施項目③：紛争解決におけるAI導入の倫理的問題を検討

実施内容：紛争解決へのAI導入にともなう倫理上の問題を日英メンバー、研究協力者、ステークホルダーで議論し、ガイド策定を目指す。

実施者：山本和彦、竹下啓介、角田美穂子

当該年度の到達点④

WP1+2+3： 法推論アルゴリズムのインパクト研究

実施項目④-2：「リーガルイノベーション」関連企画

実施内容： 角田・シュテフェック編著『リーガルイノベーション入門』
刊行関連イベントを兼ねつつ、リーガルイノベーション最先端の生レポート&読者とのフリートークセッションを通して、ステークホルダーや次世代を担う未来のリーガルイノベーターとコンセプトを共有し、議論を深める

実施者：角田美穂子

(3) 成果

① Horizon Scanningによる法律と人工知能の未来シナリオ研究グループ(WP1)

仕事を取り巻く環境が変化したとき人間の法的保護はどうなるか、人々は、企業は、紛争解決機関はAIサービスをどう使うのか。日本の労働紛争・ステークホルダーを熟知する研究協力者(荒木尚志・東京大学教授、森戸英幸・慶應義塾大学教授、神吉知郁子・東京大学准教授)の協力を得ながら、リアリティ溢れる未来シナリオを3本作成し、アニメーション化した。



図：Horizon Scanningの手法を用いた未来シナリオのアニメ動画「2030年雇用や労働に関する争いごとと人工知能 (2030: Workplace Conflicts and AI in the Future)」

日本メンバーが渡英し、英国において、対面でのHorizon Scanningワークショップを開催した。そのイベントレポートを作成し、一橋大学大学院法学研究科グローバル・ガバナンス研究所のHPで公開した。同HPでは、アニメ動画とあわせ、神吉知郁子・東京大学准教授による未来シナリオの解説とあわせ公開した(日本語版・英語版)。

<https://www.law.hit-u.ac.jp/ggr/2023/04/11/%e3%82%b1%e3%83%b3%e3%83%96%e3%83%aa%e3%83%83%e3%82%b8%e5%a4%a7%e5%ad%a6%e3%83%93%e3%82%b8%e3%83%8d%e3%82%b9%e3%83%aa%e3%82%b5%e3%83%bc%e3%83%81%e3%82%bb%e3%83%b3%e3%82%bf%e3%83%bccbr%e3%81%a8/>

https://www.law.hit-u.ac.jp/ggr/en/2023/04/11/__trashed/

② 法律と会計のコンピューテーション研究グループ (WP2)

当該年度の到達点②

WP2+3：日本版オンライン紛争解決予測システムの開発を実現する。

実施項目②-1：WP2： 普遍性ある法的推論モデルを実装したAI開発・実験
実施内容：

AIコンサルタント、法曹有資格者の協力を得て、英Court Correct社との共同研究により、①FNC法理が適用されている事件類型が英国法・米
国法・日本法判例データのそれぞれについて可視化、②日本法判例データについてはFNC法理で考慮されるファクターの抽出、③英国法・米
国法判例についても、FNC法理の適否、判断なし等に大別するシステム開
発が達成された。

期間：令和4年4月～令和5年3月末

実施者：竹下啓介、角田美穂子

協力者：Ludwig Bull、小原隆太郎、石原裕也

当該年度の到達点④

WP1+2+3： 法推論アルゴリズムのインパクト研究

実施項目④-1： 法推論アルゴリズムのインパクトについて研究

実施者：野間幹晴

会計の未来に関する共同研究を遂行しており、法推論アルゴリズムのインパクト
との比較可能性の検討につなげる。

③ 人工知能による紛争解決予測研究グループ (WP3)

当該年度の到達点②

WP2+3：日本版オンライン紛争解決予測システムの開発を実現する。

実施項目②-2：WP3：説明可能な紛争解決結果予測モデルの開発・実験

実施内容：

東京工業大学情報理工学院・徳永研究室・山田寛章「民事紛争の説明可
能な紛争解決結果予測モデル」研究(JST-ACT-X)と連携・協力しながら、
日本の実際の裁判の民事判決文書を用いた紛争解決予測システムの
データセットを構築し、様々な技術手法を用いた実験及び人手によるエ
ラー分析を実施した。

成果：データセット構築について2022年6月の国際学会にてポスター発表を実施した。

さらに実験結果とエラー分析の成果を英文で成果を取りまとめ、トップジャーナルに投稿した。

期間：令和4年4月～令和5年3月

実施者：竹下啓介、角田美穂子

協力者：得津晶、小原隆太郎

当該年度の到達点③

WP3: 紛争解決へのAI導入ガイド策定

実施項目③：紛争解決におけるAI導入の倫理的問題を検討

未実施

当該年度の到達点④

WP1+2+3：法推論アルゴリズムのインパクト研究

実施項目④-2：「リーガルイノベーション」関連企画

実施内容：角田・シュテフェック編著『リーガルイノベーション入門』
オンラインで刊行記念イベントのウェビナーを行った。

●『リーガルイノベーション入門』刊行記念イベントレポート

最初に、編者である一橋大学の角田美穂子教授が、1966年に高校の物理学の教師が物理学者リチャード・P・ファインマンに依頼して実現した電話授業のエピソードを交え、この本の元になったオンライン授業に込めた思いを語った。続いて、ケンブリッジ大学のフェリックス・シュテフェック准教授は、世界のリーガルイノベーターのトップ10は誰かという問いの難しさを論じた。有力候補のグーテンベルグの貢献もまた時代の波に洗われているなど、リーガルイノベーションは社会の中で起きるため時間の制約を免れないし、電話という画期的な技術の法的取扱いについて先見的な解釈論を提示した穂積陳重のような法学者もいれば、世の中を変える司法判断を下す裁判官や新しい立法を実現させる人も含まれ、貢献を測定する尺度についてコンセンサスを得られないであろう。

読者を代表してコメントした野村総合研究所の大崎貞和氏は、このリーガルイノベーターを広く捉えた点に魅力を見出したという。大川小学校の津波被災事件の新しい考え方を裁判所に認めさせた弁護士の話は、テクノロジーとは無縁であるが、従来の理論的枠組みでは十分な救済が難しい事態を打開していくこともイノベーションであるという考え方には大いに共感すると述べた。そのうえで立法論との棲み分けをどう考えるのか等リーガルイノベーションがもたらす変化といった次なる課題を提示した。

①テクノロジーが変える紛争解決を論じたパネルディスカッション前半では、まず冒頭で、Court Correct社創業者でCEOのロードヴィヒ・ブル氏が、英国はじめ世界中で「すべての人に司法へのアクセスを」保障できていないと指摘し、この問題に取り組む当事者として、日本に対し3つの提言を行った。①スタートアップと組んだ試行実験、②リーガルデータを最大限オープンソースに、③規制のサンドボックスである。対して、ケンブリッジ大学のサイモン・

ディーキン教授は「司法の自動化は必ず起きるだろう。しかしAIは自分を管理できないから人間の判断という役割は無くならない」、「機械は人間が操るものだが、人間は機械を完全に理解することはできない、機械のように計算することはできないからだ。」と指摘。大崎氏は、紛争解決にテクノロジーを導入するメリットは「所与」としたうえで、リスクについて、テクノロジーの暴走以上に留意すべきは、リーガルサービスの提供者を規制する弁護士法など既存の制度との関係ではないかと述べた。ブル氏は、AIをつかったサービスを提供している立場から、高い精度のAIができて人々はその根拠の「説明」がなければニーズにこたえることはできないが、その「説明」をどのようにして機械にさせるかが難しいと指摘。

後半では、②リーガルイノベーション・エコシステムの構築に向けた課題として、自然言語処理の専門家である東京工業大学情報理工学院の山田寛章助教が、わが国で民事紛争解決結果予測モデルを開発しようにも、そもそも情報インフラが整備途上であることを指摘。海外で「人間の法的判断枠組みをどう機械に解かせるか」というタスクの定式化、「法的判断を予測できたとしても説明なしでは無意味」、モデルの一般ユーザーにとって「意味のある説明とはどのようなものか」という困難な課題の研究が急ピッチで進む中、情報インフラを整備しながら研究を進めていると語った。会場から「日本の伝統食であるお餅では従来から喉に詰まらせてしまう事故が発生してきた。その後、蒟蒻ゼリーが登場し、喉に詰まらせて窒息死する事故が発生した際の世論のあり方について、どうお考えでしょうか」という質問に対し、大崎氏は、「事の本質は、蒟蒻ゼリーの目新しさにあり、自動運転車の事故と同じだと思います。まさにそのようなしいモノが起こした事故をどう捉えるかが、これからのリーガルイノベーションの課題だ」と指摘した。短時間ながら、充実した意見交換となった。

国内外から143名が視聴、見逃し配信も日本語通訳版78回、英語通訳版は258回視聴された。
(一橋大学大学院法学研究科GGR イベントレポートより)

<https://www.3cl.law.cam.ac.uk/press/events/2022/10/3cl-book-launch-legal-innovation-technology-legal-profession-and-industrial-change>

(4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

コロナ禍の影響を大きく受けて当初の予定は大幅に遅延しており、日英チームともプロジェクトの達成目標に向けて少しずつ前進はできているが、壁に突き当たっている。とりわけ、日英のコラボレーションまで行き着けていない。しかし、2023年3月にリリースされたGPT-4という革新的テクノロジーを用いた実験のチャンスも得られた。最終年度の成果に期待したい。

WP1：「仕事と労働法の未来」をテーマとする日英の未来シナリオについて比較検討を行う

WP3：日本版オンライン紛争解決予測モデルの開発を実現する。

「説明可能な民事紛争解決結果予測モデル」開発と実験

データセット公開に向けた環境整備もおこなう

民間データベース会社の協力を得てAI開発実験を実施し、研究成果を公

表した以上、データセットを公開する必要があるが、当事者の利害調整が必要となる。法曹有資格者、東京工業大学・徳永研究室等の協力を得ながら、利用規約、データ配布を行う機関との委託契約、データ配布にかかるガイドライン等を整備し、ベストプラクティスを目指す。

WP2+WP3 UK+JP 民事紛争解決結果予測モデルの法制度・言語を横断した実験・分析を試みる
法制度・言語を横断した民事紛争解決結果予測モデルの実験・研究

WP3: 紛争解決へのAI導入ガイド策定

-1: 紛争解決結果予測モデルのためのデータセット構築ガイドの作成・公表

日本の限られたデータ環境ゆえに、日本初の民事紛争解決結果予測モデル開発にあたっては、テーマを1つに絞ったうえで、紛争解決結果を左右した箇所を特定してラベル付けをおこなうアノテーションも自動化できないことから、法曹有資格者や法科大学院修了生を募って類例のない大規模アノテーションを実施した。こうして、SNSなどオンラインでの中傷誹謗を中心とする不法行為事件8000件からなるデータセットが構築された。その方法論は、国際カンファレンスで一定の評価を得たが、日本において実効性あるオンライン紛争解決システムを実現していくためには、当該データセットの応用のほか、対応事件類型の拡張が強く求められると考える。そこで、東工大・徳永研究室の協力を得ながら、エッセー風の、アノテーションのタスク・デザイン等をはじめとする紛争解決に資するAI開発ガイドを作成・公表し、同種の研究促進を図れる環境整備をおこないたい。

-2: 紛争解決におけるAI導入の倫理的問題を検討

WP1+2+3: 法推論アルゴリズムのインパクト研究

2 - 3. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
令和4年4月25日	第1回 WP1 労働法の未来 Brainstorming	オンライン	研究グループの狙いと顔合わせ 未来洞察イントロダクション 労働法の未来を考える 8名
令和4年5月16日	第2回 WP1 Future of Work and Labor Law Brainstorming	オンライン	Innovating Access to Justice through the use of Technology and how technology is changing”the future of work and labor law?” UK+JP 11名
令和4年7月22日	第3回 WP1 働き方と労働法の未来	オンライン	未来予測を通して労働法制度の「立ち返り」の機会とする 8名

令和5年1月17日	WP1仕事と労働法の未来 アニメーションシナリオ意見交換会	オンライン	絵コンテをもとに、ストーリーにリアリティを持たせる改善案を検討した。8名
令和4年7月6日	WP2 Court Correct×一橋	オンライン	英米日法のFNC法理の判例データの比較
令和4年9月27日	WP2 Court Correct×一橋	オンライン	英米日法のFNC法理の判例データの比較
令和4年11月17日	WP2 Court Correct×一橋	オンライン	共同研究の方針検討
令和5年1月18日	WP2 Court Correct×一橋	オンライン	Court Correct社により実施された英米判例データに関する予備実験の結果の検討
令和4年5月12日	WP3/ACT-X 東工大・徳永研×LIC×一橋	オンライン	国際学会での反響共有、データセット公開に向けた検討
令和4年7月7日	WP3/ACT-X 東工大・徳永研×LIC×一橋	オンライン	国際学会の反響・研究動向の共有、AI実験の進捗
令和4年9月29日	WP3/ACT-X 東工大・徳永研×LIC×一橋	オンライン	ACT-X領域会議の情報共有、研究活動方針の検討
令和4年9月30日	WP2+3 UK+JP	オンライン	1. Mutual reporting of research status and exchange of views 2. Exploring possibilities for collaborative experiments 3. Events to present the results of the PJ as a whole UK+JP 15名
令和4年11月10日	WP3/ACT-X 東工大・徳永研×LIC×一橋	オンライン	AI実験進捗、投稿論文の骨子検討
令和4年12月16日	WP3/ACT-X 東工大・徳永研×LIC×一橋	オンライン	AI実験進捗、投稿論文内容検討、エラー分析方針検討
令和5年1月23日	WP3/ACT-X 東工大・徳永研×LIC×一橋	オンライン	投稿論文の検討、エラー分析の検討
令和5年2月15日	WP3/ACT-X 東工大・徳永研×LIC×一橋	オンライン	投稿論文の検討、エラー分析の検討

令和5年3月 22日	WP2+3 UK+JP	ケンブリッジ 大学	プロジェクトメンバーUK+JPによるハイブリッドMTG。
令和5年3月 23日	Horizon Scanning手法による未来洞察ワークショップ WP1 UK+JP	ケンブリッジ 大学	20名は外部から招聘。全32名参加(プロジェクトメンバーを含めて、内5名は日本チームが渡英)。

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

WP1の研究成果であるHorizon Scanningの手法を用いた未来シナリオのアニメ動画「2030年 雇用や労働に関する争いごとと人工知能 (2030: Workplace Conflicts and AI in the Future)」を、神吉知郁子・東京大学准教授による未来シナリオの解説とあわせ、一橋大学大学院法学研究科グローバル・ガバナンス研究所のHPで公開した(日本語版・英語版)。

<https://www.law.hit-u.ac.jp/ggr/2023/04/11/%e3%82%b1%e3%83%b3%e3%83%96%e3%83%aa%e3%83%83%e3%82%b8%e5%a4%a7%e5%ad%a6%e3%83%93%e3%82%b8%e3%83%8d%e3%82%b9%e3%83%aa%e3%82%b5%e3%83%bc%e3%83%81%e3%82%bb%e3%83%b3%e3%82%bf%e3%83%bccbr%e3%81%a8/>

https://www.law.hit-u.ac.jp/ggr/en/2023/04/11/__trashed/

4. 研究開発実施体制

● **WP1： Horizon Scanningによる法律と人工知能の未来シナリオ研究グループ (グループリーダー： 鷲田祐一)** 一橋大学大学院経営管理研究科

実施項目①：未来シナリオ「仕事と労働法の未来」日英比較

実施内容：ギグエコノミーが進展し、司法判断を実装したAIサービスが普及した社会がどのようなようになるか、イギリスで実施したHorizon Scanningワークショップの成果から社会変化仮説を析出し、日本のそれと比較検討する。さらには、イギリスにおけるワークショップを踏まえ英国の「仕事と労働法の未来」未来イシューを作成し、労働法の専門家の協力を得ながら、日本のそれと比較検討する。

プロジェクトの実施者

研究代表者 氏名	所属	役職(身分)	エフォート	役割	立場
鷺田祐一	一橋大学	教授	20%	未来シナリオ作成ワークショップの実施、ウェブアニメ動画作成	グループリーダー
研究参加者 氏名	所属	役職(身分)	エフォート	役割	立場
角田美穂子	一橋大学	教授		未来シナリオ作成ワークショップの実施	学・人
上原渉	一橋大学	准教授		未来シナリオ作成ワークショップの実施	学・人
古江奈々美	東京理科大学	助教		未来シナリオ作成ワークショップの補佐	学・人
松永統行	国際経済社会研究所	主任研究員		未来シナリオ作成ワークショップの補佐	民・自

グループへの協力者

氏名 所属 役職 (又は組織名)	本研究開発プロジェクトへの協力内容	これまでの協力関係の有無
古川一郎 武蔵野大学 教授	日本での未来シナリオ作成ワークショップの補佐	有
七丈直弘 一橋大学 教授	日本での未来シナリオ作成ワークショップの補佐	有
鳥海不二夫 東京大学 准教授	日本での未来シナリオ作成ワークショップの補佐	有
森永正男 オーバルコミュニケーションズ 社長	ウェブアニメ動画作成の補佐	有
荒木尚志 東京大学大学院法学政治学研究科 教授	法推論アルゴリズム研究の労働法学・政策上のインパクトについて知見の提供	有
森戸英幸 慶応義塾大学法務研究科教授	法推論アルゴリズム研究の労働法学・政策上のインパクトについて知見の提供	有
神吉 知郁子 東京大学大学院法学政治学研究科 准教授	法推論アルゴリズム研究の労働法学・政策上のインパクトについて知見の提供	有
小原隆太郎 中村・角田・松本法律事務所	法推論アルゴリズムのインパクト研究(未来シナリオ作成)にあたって法曹実務家の知見の提供	有
石原 裕也 (株)Xspear Consulting マネージャー	法推論アルゴリズムのインパクト研究(未来シナリオ作成)にあたって人工知能の知見の提供	有

● **WP2：法律と会計のコンピューテーション研究グループ（グループリーダー：野間幹晴）**

実施項目③：法制度・言語を横断した民事紛争解決結果予測モデルの実験・研究

実施項目⑤：法推論アルゴリズムのインパクトについて研究する

プロジェクトの実施者

グループリーダー 氏名	所属	役職(身分)	エフォート	役割	立場
野間幹晴	一橋大学	教授	15%	法推論アルゴリズム 開発のインパクト研 究	グループリ ーダー
研究参加者 氏名	所属	役職(身分)	エフォート	役割	立場
角田美穂子	一橋大学	教授		法推論アルゴリズム 開発のインパクト研 究	学・人
竹下啓介	一橋大学	教授		法推論アルゴリズム 開発のインパクト研 究	学・人

グループへの協力者

氏名 所属 役職 (又は組織名)	本研究開発プロジェクトへの協力内容	これまでの 協力関係の有無
岡田羊祐 公正取引委員会 研究センター長	競争政策の観点から法的判断の自動化(例えば、カルテル等の違法行為のスクリーニング装置としてのAI)に関する知見の提供	有
小原隆太郎 中村・角田・松本法 律事務所	法推論アルゴリズムのインパクト 研究補佐	有
Ludwig Bull Court Correct CEO	法的推論モデルを実装したA I 開 発・実験への人工知能の知見の提 供	有
石原 裕也 (株)Xspear Consulting マネージャー	法的推論モデルを実装したA I 開 発・実験への人工知能の知見の提 供	有

判例秘書(提供会社LIC)	判決データの提供	有
---------------	----------	---

●WP3:人工知能による紛争解決予測研究グループ (グループリーダー：山本和彦)

一橋大学大学院法学研究科

実施項目②-1：「説明可能な民事紛争解決結果予測モデル」開発と実験

実施項目②-2：データセット公開に向けた環境整備

実施項目③：法制度・言語を横断した民事紛争解決結果予測モデルの実験・研究

実施項目④-1：紛争解決結果予測モデルのためのデータセット構築ガイドの作成・公表

実施項目④-2：紛争解決におけるAI導入の倫理的問題を検討

実施項目⑥：角田・シュテフェック編著『リーガルイノベーション入門』（2022年3月・弘文堂）の英語版刊行

プロジェクトの実施者

グループリーダー 氏名	所属	役職(身分)	エフォート	役割	立場
山本和彦	一橋大学	教授	15%	人工知能による紛争解決予測システムの日英共同研究マネジメント	グループリーダー
研究参加者 氏名	所属	役職(身分)	エフォート	役割	立場
角田美穂子	一橋大学	教授		人工知能による紛争解決予測がもたらす法的課題の研究	学・人
竹下啓介	一橋大学	教授		日英共同研究マネジメント補佐、民事裁判例データセット構築のあり方、法的判断への人工知能活用に関する研究	学・人

グループへの協力者

氏名 所属 役職 (又は組織名)	本研究開発プロジェクトへの協力内容	これまでの 協力関係の有無
得津 晶 一橋大学大学院法学研究科 教授	人工知能による紛争解決予測システム開発の補佐	有
Ludwig Bull Court Correct CEO	人工知能による紛争解決予測システム開発の補佐、先端的法学教育に関する知見の提供	有
徳永健伸 東京工業大学情報理工学院 教授	日本の裁判文書の自然言語処理に関する人工知能学の知見の提供	有
山田寛章 東京工業大学情報理工学院 助教	日本の裁判文書の自然言語処理に関する人工知能学の知見の提供	有
小原隆太郎 中村・角田・松本法律事務所	人工知能による紛争解決予測システム開発の補佐、データセット公開の環境整備のための法的知見の提供	有
判例秘書(提供会社LIC)	判決データの提供	有
小塚荘一郎 学習院大学 教授	人工知能のガバナンス、裁判文書の比較法的知見の提供	有

● 研究全体のマネジメント(プロジェクトリーダー：角田美穂子)

一橋大学大学院法学研究科

角田は日本側の各WPIに参画しながら研究代表者として、英国側の研究代表者である

Deakin(WP1/2のグループリーダーも兼ねる)およびWP3のグループリーダーであるSteffekと密に連絡をとり、共同研究プロジェクトが最大限有効に機能するよう企画立案をする。

本プロジェクトが日英共同研究として成果をあげるためには日本の多様なステークホルダーの協力支援と多様なイベントへの主体的な参画が欠かせない。山本・竹下両名は、そのための連携体制構築を行う。

5. 研究開発実施者

WP1グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
鷺田 祐一	ワシダ ユウイチ	一橋大学	経営管理研究科	教授
角田 美穂子	スミダ ミホコ	一橋大学	法学研究科	教授
上原 渉	ウエハラ ワタル	一橋大学	経営管理研究科	准教授
古江 奈々美	フルエ ナナミ	東京理科大学	経営学部経営 学科	助教授
松永 統行	マツナガ	国際経済社会研究所		主任研究員

WP2グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
野間 幹晴	ノマ ミキハル	一橋大学	国際企業戦略研究科	教授
角田 美穂子	スミダ ミホコ	一橋大学	法学研究科	教授
竹下 啓介	タケシタ ケイスケ	一橋大学	法学研究科	教授

WP3グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
山本 和彦	ヤマモト カズヒコ	一橋大学	法学研究科	教授
角田 美穂子	スミダ ミホコ	一橋大学	法学研究科	教授
竹下 啓介	タケシタ ケイスケ	一橋大学	法学研究科	教授

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2022年10月14日	『リーガルイノベーション入門』刊行記念イベント	一橋大学法学研究科 GGR・ケンブリッジ大学法学部3CL	オンライン	143	見逃し配信 日本語版78回・英語版258回視聴
2023年3月23日	「法律と人工知能」未来洞察ワークショップ	一橋大学法学研究科 GGR・ケンブリッジ大学ビジネススクール「ビジネスリサーチセンター(CBR)」	ケンブリッジ	32名	仕事と労働法の未来についてHorizon Scanningの手法による未来洞察ワークショップ(午前・午後) 20名は外部から招聘。全32名参加(プロジェクトメンバーを含めて、内5名は日本チームが渡英)。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

・Felix Steffekと共に『リーガルイノベーション入門』の英語版”Legal Innovation: Technology, the Legal Profession and Societal Change”刊行をCambridge University Pressに提案、査読の末、刊行が決定した。

(2) ウェブメディアの開設・運営

・研究プロジェクト「法制度と人工知能」紹介ページの開設 2022年10月(日本語・英語)
<https://www.law.hit-u.ac.jp/ggr/programs/legal/legal-systems-and-artificial-intelligence/>

<https://www.law.hit-u.ac.jp/ggr/en/programs/legal-innovation-program/legal-systems-and-artificial-intelligence-en/>

- ・ 「リーガルイノベーション入門」 刊行記念イベントレポート

https://www.law.hit-u.ac.jp/ggr/2023/01/11/event_report/?hilite=%E8%A7%92%E7%94%B0%E7%BE%8E%E7%A9%82%E5%AD%90

- ・ GGRイベントレポート「ケンブリッジ大学ビジネスリサーチセンター(CBR)との共催で「法律と人工知能」をテーマとする未来洞察ワークショップを開催」(日本語・英語) そのなかで「仕事と労働法の未来」をテーマとする未来シナリオのアニメーション動画を公開

「2030: Workplace Conflicts and AI in the Future」

https://drive.google.com/drive/folders/1LUvBr-ptVqs1aSNE5xmc6WrKnN5uJESl?usp=share_link

<https://www.law.hit-u.ac.jp/ggr/2023/04/11/%e3%82%b1%e3%83%b3%e3%83%96%e3%83%aa%e3%83%83%e3%82%b8%e5%a4%a7%e5%ad%a6%e3%83%93%e3%82%b8%e3%83%8d%e3%82%b9%e3%83%aa%e3%82%b5%e3%83%bc%e3%83%81%e3%82%bb%e3%83%b3%e3%82%bf%e3%83%bccbr%e3%81%a8/?hilite=%E8%A7%92%E7%94%B0%E7%BE%8E%E7%A9%82%E5%AD%90>

- (3) 学会 (6-4.参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ 「科学はデジタルに呑み込まれるのか」 登壇、2022年11月29日、ウェブ、森アカデミー×JST-RISTEX HITE主催

<https://www.tsukuba-sci.com/?column01=ristex%e3%83%bbhite%e9%a0%98%e5%9f%9f%ef%bc%8f%e6%a3%ae%e3%83%93%e3%83%ab%e3%82%a2%e3%82%ab%e3%83%87%e3%83%9f%e3%83%bc%e3%83%92%e3%83%ab%e3%82%ba-%e3%82%b3%e3%83%a9%e3%83%9c%e3%82%a4%e3%83%99%e3%83%b3>

- ・ 東京弁護士会有志会、角田美穂子「リーガルイノベーション入門」、2022年12月20日、ウェブ

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (1 件)

●国内誌 (0 件

▽・

●国際誌 (1 件)

・ Hiroaki Yamada, Takenobu Tokunaga, Ryutaro Ohara, Keisuke Takeshita, Mihoko Sumida, Annotation Study of Japanese Judgments on Tort for Legal Judgment Prediction with Rationales, *In The Proceedings of The 13th Language Resources and Evaluation Conference, LREC 2022, Marseille, France, June 21-23, 2022.*

(2) 査読なし (1 件)

・角田美穂子「自著を語る：角田美穂子＝フェリックス・シュテフェック共編著『リーガルイノベーション入門』(弘文堂)」金融・資本市場リサーチ7号、2022年8月

・

6-4. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演(国内会議 0 件、国際会議 0 件)

・

(2) 口頭発表(国内会議 0 件、国際会議 0 件)

・

(3) ポスター発表(国内会議 0 件、国際会議 1 件)

・ Hiroaki Yamada, Takenobu Tokunaga, Ryutaro Ohara, Keisuke Takeshita, Mihoko Sumida, Annotation Study of Japanese Judgments on Tort for Legal Judgment Prediction with Rationales, *In The Proceedings of The 13th Language Resources and Evaluation Conference, LREC 2022, Marseille, France, June 21-23, 2022.*

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (0 件)

・

(2) 受賞 (0 件)

・

(3) その他 (0 件)

・

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)